

秘密と恥

——日本のコミュニケーションの分析に向けて（１）——

正 村 俊 之

I. 問題設定

旧約聖書は、最初に神による天地創造を説いている。人間の長い歴史は、アダムとエバが楽園から追放されることから始まる。知恵の実を食べるまえ、アダムとエバは「二人とも裸であったが、恥ずかしがりではなかった」（〔1989：創世記〕）。「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知ることを神はご存じなのだ」という蛇の誘惑につられて、二人は知恵の実を食べてしまう。すると「二人の眼は開け、自分たちが裸であることを知り、二人は無花果の葉を綴りあわせ、腰を覆うものとした」。そして、禁断の果実をとった罪で楽園から追放されてしまった。

この墮罪の物語には、人間社会を考える上でいくつかの重要な問題が提示されている。その問題とは、知、性、権力、そして罪と恥である。知、性、権力は、今世紀の代表的な哲学者 M. フーコーが西欧社会を考察する上で扱った主要なテーマであった。フーコー（〔1986〕）によれば、近代の主体としての個人は、一定の権力作用によって産み出されたものだという。聖書のなかで地上の人間が誕生するきっかけとなったのは、アダムとエバが知恵の実を食べたこと、この二人が神の手によって楽園から追放されたことにある。楽園からの追放を一種の権力作用として捉えるならば、人間の成立は、まさに知の獲得と権力の働きによるということになる。そして、罪を負うという代償を払って獲得した知は、二人を異なった性の存在として意識させ、裸身であることに羞恥の念を呼び起こした。人間の根本的条件である知のまわりに、権力、性、罪、恥

が配置されているわけである。

ところで、この墮罪の物語は、また恥が秘密の問題と深く関連していることを示唆している。知は、単に現実的世界の認識を可能にするだけではなく、理想や理念によって組み立てられた可能的世界の把握をも可能にする。このような知に支えられて、「善悪を知る」という価値判断を行うことができる。知を手にした人間は、裸身でない本来の自分の姿を思い描くことによって、裸身のままでいる現実の自分の姿に羞恥の念を覚える。裸身を隠すとは、相手にたいして秘密をもつことを意味している。墮罪の物語は、こうした恥と秘密の結びつきを垣間見させてくれるのである。

罪と恥——これは、R. ベネディクトが欧米と日本をそれぞれ「罪の文化と恥の文化」と規定して以来、日本論のなかで長年物議をかもしてきたテーマである。日本論の古典ともいえる『菊と刀』のなかで、ベネディクトは「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのにたいして、真の恥の文化は外面的な強制力にもとづいて善行を行う」(〔1972：258〕)と述べた。この主張がさまざまな論議を巻き起こし、戦後の日本論の展開を促すきっかけとなったことは、改めて述べるまでもない。多くの論争を経た今日、我々は、このベネディクトの命題をどのように評価したらよいのであろうか。

これから数回にわたって日本のコミュニケーションに関する分析を試みるが、第1回目として「秘密と恥」というテーマを取り上げる。コミュニケーション論的な視点から、秘密と恥に関する一般理論的な考察を行い、その上でこのベネディクトの命題を検討してみよう。その際、伝統的なコミュニケーション論がメッセージをいかにして伝えるかという点にもっぱら関心を払ってきたのにたいして、ここでは発想を逆転させ、メッセージをいかにして伝えないようにするかという点に分析の基本的な焦点をあててみる。

受け手の能動的な意味理解を等閑視してきた伝統的なコミュニケーション論の立場に立てば、送り手がメッセージを意図的に送らなければ、メッセージは伝わらない。けれども、他者の面前に立つ限り、送り手は、自分の意図を越えてさまざまなメッセージを受け手に流している。何の発言もせず、何の行為も

せずとも、そのことがまた、受け手にとっては送り手を表現するメッセージになっている。

相手にたいして秘密をもつこと、すなわちメッセージを送らないということは、送り手の個人的な意志に還元されるような問題ではない。それは、メッセージを伝える場合と同様に、送り手と受け手との関係の中で決定される社会的な過程をなしている。本稿では、コミュニケーションを裏側から照らし出すことによって秘密と恥の本質を探り出してみよう。

Ⅱ. 秘密

1. 秘密の精神病理としての分裂病

誰でも、子供の頃「ウソは泥棒の始まりである」という言葉を聞かされた経験があるだろう。ウソをつくとは、事実の隠蔽であるゆえに、秘密をもつことにほかならない。日常生活のなかで‘秘密’というと、何か後ろめたいもの、薄暗いものを感じさせる。そうだとすれば、秘密はなるべくもたないほうがよいことになる。だが、果たしてそうなのだろうか。

秘密を分析するためには、まずこうした日常的な先入見を捨ててかかる必要がある。人間の精神構造を発達させる上で秘密が不可欠であることを理解するために、精神分裂病を一例に取り上げてみよう。

発達心理学の知見によれば、人間は、誕生後しばらくのあいだは自他未分の状態にある。乳児は、このような状態のなかでナルチズム的な全能感に浸っている。しかし、認知能力が発達するにつれて、自他未分的な状態は、徐々に乗り越えられていく。認知能力の発達は、抽象的・体系的な操作が可能になる「形式的操作期」(J. ピアジェ [1968])において最終段階を迎えるが、ほぼこの時期に自他の分節化も基本的な完成をみる。

青年期に相当するこの時期は、また分裂病の好発期でもある。それは、木村敏([1975])によれば、患者がこの段階における自他の個別化に失敗し、そのことがきっかけとなって、これまで築き上げてきた自他の境界構造までも崩壊していくからであるという。

分裂病には、他の精神病にはない特有な妄想体験がみられる。その妄想体験とは、自分の外に存在するはずの他者が忽然と自分のなかから現れてくるという体験であり、また自分の考えていることが周囲に筒抜けになってしまうという体験である。他者が自分の内面に侵入することと、自分の考えがすべて他者に知られてしまうことは、実は表裏一体をなしており、自他の境界が退行的に喪失したことを物語っている。

分裂病患者にとっては、他人に窺い知ることのできない自分の内面的世界は、もはや失われてしまった。患者は、自分の秘密をもてない状態にある。自他の境界は、お互いが異なった身体をもつことを基盤にしているとはいえ、物理的境界ではなく、あくまで意味的境界である。秘密をもつとは、自他の境界を設定し、自他を分節化するような意味的な作用である。R. エクスタイン（[1972]）がいうように、ウソをつくことと盗みを働くことは、心理学的には対極に位置している。なぜなら、「すべての盗みは、我がものと汝のもの、自己と対象との原初的な一体感に由来している」（A. フロイト）からである。

このように人間は、自他関係の変革をととして自分の内面的世界を築き上げていく。人間が社会的存在であるのは、単に他者と共同生活を営んでいる点にあるのではなく、自分の内面的世界が自己を取り巻く社会的関係と分かち難く結びついている点にある。秘密は、そうした内面的世界と自他関係のあり様を規制する一つの基本的な要因である。しかも自他の境界設定は、秘密が果たす機能のなかの一つにすぎない。秘密がほかにどのような機能を果たすのかはあとで論ずることにして、まず秘密の内容について検討しよう。後述するように、恥は多様な形態をとるが、恥の内容的な多様性は、秘密の内容的な多様性からきているのである。

2. 秘密の類型

秘密は、社会的な相互行為を行う過程で発生する。それゆえ、秘密を類型化するためには、社会的行為の理論に準拠する必要がある。E. ゴッフマンのパフォーマンス論（[1974]）は、そのための格好の手掛かりを提供してくれる。

パフォーマンスは、オーディエンスを前にしたパフォーマーによって演じられる。パフォーマンスが演じられるのは表舞台であるが、舞台裏もパフォーマンスの達成に欠かせない。というのも、パフォーマンスを成功させる上でオーディエンスに見られてはならない側面は、すべてこの舞台裏で処理されるからである。表舞台と舞台裏という場所的・実体的な区別を取り払うと、パフォーマンスの仕組は、次のように定式化することができる。すなわち、パフォーマンスは、オーディエンスに隠された部分をもつことによって、パフォーマンスという、オーディエンスに披露される活動を成功させうる、と。こう解釈すると、右の命題は、演劇やショーのみならず、すべての社会的行為に適用しうる。ただし、何がどのように隠蔽されねばならないのかは、社会的行為（パフォーマンス）の形態によって異なる。

(1) 戦略的秘密と反価値的秘密

ゴッフマンも指摘しているように、パフォーマンスには、課題達成的な側面と自己呈示的な側面が含まれている。例えば、本人はひたすら仕事に没頭している場合でも、まわりの人間は、その姿を見て「仕事熱心な人だ」という印象を受ける。また逆に、「仕事熱心な人だ」という印象を周囲に与えるためには、仕事に没頭しているかのようなふりをするだけの仕事をしなければならない。

この二つの側面は相互に包摂しあっているわけだが、ここから社会的行為に関する二つの類型を導き出すことができる。すなわち、①課題達成を目的として行われる戦略的な行為と、②自己呈示を目的として行われる価値実現的な行為である。これらの社会的行為には、それぞれ特有な秘密が発生する。それが、①「戦略的秘密」と②「反価値的秘密」である。

戦略的秘密とは、戦略的行為を成功させるために隠蔽しておかねばならない秘密である。その代表的な例が企業秘密である。斬新な車を売りだそうとしている自動車メーカーは、企画から生産に至る行程すなわち販売を除く全行程がライバル企業や顧客の目に触れてはならない秘密となる。戦略的行為の場合には、その行為の一部が戦略的秘密を構成し、また別の一部がパフォーマンスとなる。したがって、戦略的秘密とパフォーマンスは、①直列的なつながりをも

ち、②（機能のみならず内容においても）整合的な関係にある。

一方、反価値的秘密とは、自己呈示を成功させるために隠蔽しておかねばならない秘密である。例えば、人格高潔を売り物にしている道徳家にとって、過去に犯した罪は反価値的秘密となる。ここで隠蔽されねばならないのは、呈示しようとしている自己像に矛盾するような行為や事態である。一般に、自己呈示は自我理想をかたちづくる価値に導かれているので、自己像に矛盾する行為や事態は反価値的な性格を帯びる。

自己呈示のパフォーマンスにおいて、オーディエンスに呈示される部分と隠蔽されるべき部分との関係は、G. ヘーゲル（[1956]）がいった「規定（肯定）と限定的否定」の関係に対応している。あるものを規定するとは、諸々の限定的否定を加えることである。行為の世界も、これと同じ判断の構造の上に成り立っている。「私は高潔な人間である」という自己呈示は、「私は泥棒ではない」「ベテナーではない」「殺人者ではない」……といった諸々の限定的否定を加えることでもある。もし、それらの限定的否定に反する事態が一つでもオーディエンスに発覚された場合には、自己呈示は失敗に終わる。

自己呈示を成功させるためには、こうした自己呈示における限定的否定に反する一切の側面、いかえれば自己呈示という価値実現の外側に立つ一切の反価値的な行為や事態を隠蔽しておかねばならない。したがって、自己呈示の場合、パフォーマンスと反価値的秘密は、①並列的なつながりをもち、しかも②（機能的には適合的だが、内容において）対立的な関係にある。

(2) 措定的秘密と非措定的秘密

対面的な相互行為は、行為者が「同じ時間に・同じ場所で」出会うことによって営まれており、この同一の状況を構成する二つの要素のうちのどちらを欠いても、対面的な相互行為は成り立たない。ところが、相手と共有しうる状況の範囲はきわめて限られており、我々はそれぞれ個別的な状況のなかで生きている。時間的ズレと空間的ズレによって生み出される「状況隔離」こそ、他者の視線から自己を守る自然の防壁をなしている。そのためにまた、他者に隠されている部分のすべてが当人に秘密として意識されることもないのである。

秘密に関する従来の研究は、主として本人が秘密として明確に意識しているものだけを扱ってきた。しかし、秘密と恥の本質を捉えるためには、秘密の概念を拡大しなければならない。秘密は、隠蔽されることにおいてその本領を発揮する。「悪事、身体的欠陥、性器」といった誰もが思い浮かべる秘密は、隠されていることがすでに知られている秘密であり、秘密の本源的な形態ではない。一方、S. フロイトの「無意識」のように、他者のみならず自己にとってもその存在自体が隠蔽されている秘密は、本稿で取り上げる対象ではない。なぜなら、秘密は、意識の了解作用のもとで、境界設定をはじめとする社会的機能を果たしうるからである。

以上のことを踏まえると、秘密は、隠蔽されている事柄を秘密にする必要性が本人に意識されているか否かに応じて、「措定的秘密」と「非措定的秘密」とに分けられる。

措定的秘密とは、他者にたいして隠蔽されているが、自己にとってはその秘密の必要性が意識されている（すなわち隠蔽されていない）秘密である。つまり、従来研究されてきた秘密である。これにたいして、非措定的秘密とは、他者にたいして隠蔽されていると同時に、自己にとってもその秘密の必要性が意識されていない（すなわち隠蔽されている）秘密である。ただし、その秘密の必要性は、本人に意識される可能性をつねにもっている。秘密が対象的に指定されるのに伴って、非措定的秘密は措定的秘密に移行する。戦略的秘密と反価値的秘密は、いずれも措定的秘密と非措定的秘密を含んでいる。

企業秘密としての戦略的秘密は、措定的秘密であるばかりでなく、戦略的行為が秘密保持の観点からコントロールされている。自動車メーカーには、わざわざ周囲を山で囲まれたところに研究所を設立して新車の開発を行っている企業もある。それとは対照的に、近所のラーメン店の料理法は、一般に非措定的秘密である。外部の人間に伺い知れないとはいえ、この秘密は状況隔離が生んだ自然の結果にすぎない。とはいえ、店が繁盛しだし、店の主人に欲が出てくると、いくら聞いても教えてくれないかもしれない。その時、非措定的秘密は措定的秘密に変わっている。

一方、自己呈示を行う際、限定的否定に反する事態がすでに存在している場合には、隠蔽すべき事柄は、概して措定的秘密になっている。道徳家にとって過去に犯した罪は、容易に忘れえぬ秘密である。戦略的行為の場合と同様に、道徳家は、秘密が漏れないように十分な注意を払いながら行動するだろう。

しかし、限定的否定に反する事態が可能的な事態にとどまっている場合には、秘密の多くは非措定的秘密である。例えば、一人の政治家が大勢の聴衆にむかって大演説をぶち、意気揚々とした気持ちでステージを降りる時、誤って足を踏み外し、下まで転げ落ちてしまったとする。聴衆の前でとんだ恥をかくことになったわけだが、階段から転げ落ちるという事態は、恐らく本人にとって隠蔽すべき事態として意識されてはいなかったはずである。なぜなら、限定的否定に反する可能的な事態は、ほかにも数多く存在するからである。そうだとすれば、この事態は、有能な政治家を演ずるために隠蔽しておかねばならなかった非措定的秘密である。ただし、そのことに本人の反省が向けられると、この秘密は措定的秘密へと変わる。

(3) パフォーマティブな秘密

秘密の概念を非措定的秘密にまで拡張すると、戦略的秘密や反価値的秘密とは異なるタイプの秘密の存在が浮き彫りにされてくる¹⁾。

パフォーマーは自分の戦略を実行したり、自我理想的な価値を実現したりするとはいえ、すべてパフォーマーとオーディエンスとの相互行為をとおしてパフォーマンスを演じている。秘密のなかには、このような行為者の目標をとげる上で要請されるのとは異なるタイプの秘密がある。つまり相互行為の種類が何であれ、相互行為そのものを成立させるために要請される秘密がある。それがパフォーマティブな秘密である。

パフォーマティブな秘密は、行為者の目標とは無関係に、その都度の状況的な相互行為に即して発生する。そのため、この秘密には、事態の進展とともに

1) ゴッフマンは、秘密を機能の観点から、①暗い秘密、②戦略的秘密、③部内秘密に分類している。このなかで、①と②は、本稿でいう反価値的秘密、戦略的秘密に該当するが、部内秘密とパフォーマティブな秘密は別物である。

現れては消えていく「状況的な秘密」が多いが、なかには、いかなる状況においても恒常的に伏在している「構造的な秘密」もある。この秘密は、戦略的な行為連関や自己呈示的な行為連関というコンテキストのなかで反省的に捉えられることによって措定化されるが、同時に、戦略的秘密ないし反価値的秘密に変質している。パフォーマティブな秘密は、それ自体として意識化されることはなく、つねに非措定的秘密にとどまっている。その意味で、この秘密は、演劇的であると同時に遂行的な秘密である。

ここで状況的な秘密の例を二つ挙げておこう。いま仮に、X氏がY氏の話を知っているうちに、Y氏に憤りを感じたとする。それでも、X氏は顔には出さず、相手の話に耳を傾けようとした。しかし、話を聞けば聞くほど、心の興奮は高ぶり、ついに怒り心頭に達しようとした。だがその瞬間、はたと思った。「いや、ここで癪癪玉を破裂させては後々まずい。やはり人と人との和だ!」。

この場合、怒りをひそかに感じた時点でパフォーマティブな秘密が発生している。なぜなら、表情に現さない怒りとは、対人関係を継続させるために必要な演劇的な秘密であり、しかも、隠蔽の必要性がまだ本人にも自覚されていない遂行的な秘密でもあるからである。この秘密は、相手との関係を維持するという自分の戦略に組み込まれた時点で意識化されるが、同時に戦略的秘密に変わっている。

次は、金田一春彦が「間（バツ）の悪さ」をアメリカ人に説明するために話した自分の体験談である。「私がはじめ表へ出ていく時に奥さんに会釈して通り過ぎた。忘れ物に気づいて引き返した。……私は奥さんに姿を見られることなく家に引き返す。ところが私が忘れ物を手にして家を出、もう一度その屋敷の前を通りかかると、また奥さんが庭に出ていてこっちを向いていることがある。困るのはその時である。……この気持ちが『間が悪い』だ」([1975])。

「間が悪い」という羞恥の感情は、恥辱とは異なる恥の一形態だが、ここでも秘密が関連している。仕事に行く恰好をして朝の挨拶を交わすことは、「私はこれから仕事に行きます」と宣言しているに等しく、「私はもうこの場におりません」という一つの限定的否定を加えている。それなのに、自分が相変わらずそ

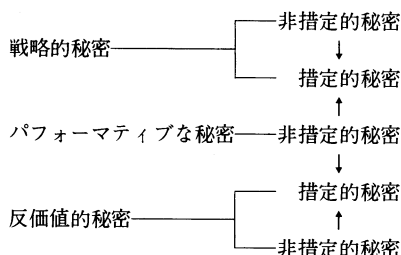


図1 秘密の諸類型

の場にいることは、相手と交わした挨拶を自ら否定したことになる。この挨拶を無効にしないためには、しばらくの間、私の姿を相手の目に触れさせないことが必要であり、私の存在自体が状況的な秘密を構成しなければならない。

したがって、私がまだこの場にいることは、挨拶という相互行為を有意味なものにするために隠蔽しておかねばならない演劇的な秘密であり、しかも「間の悪さ」を体験する以前においては、そうした隠蔽の必要性が当人にも意識されていない遂行的な秘密なのである。隠蔽の必要性は、「間の悪さ」の体験とともに反省的に意識化されるが、その時この秘密は、例えば「自分は忘れ物をするドジな人間ではない」という自己呈示をするための反価値的秘密に変わっている。

このように、すべての相互行為の成立や継続に不可欠でありながら、他人にも自分にもその秘密性が隠蔽されている秘密がパフォーマティブな秘密である。相互行為の状況的な展開とともに、パフォーマティブな秘密のうち、あるものは消滅し、あるものは戦略的秘密や反価値的秘密へと変質するが、また別なあるものが生み出される（なお「構造的な秘密」は、恥のところで説明する）。いずれにしても、パフォーマティブな秘密は、つねに当人の反省的な意識から逃れ、潜在的なレベルにとどまっている。ここに、この秘密の本源的な性格を看て取ることができる（図1）。

3. 秘密の作用

次に、秘密の働きについて論じよう。恥は秘密の特定の働きと結びついているが、恥の特質を理解するためには、恥を秘密の働き全体のなかに位置づけなければならない。秘密の作用は、秘密の扱い方に応じて大きく四つの類型に分けられる。

(1)秘密の保持（非漏洩）

秘密を保持することは、さまざまな境界設定に役立つ。その代表例が、すでに述べた自他の分節化である。自己における秘密の保持と自他の境界設定が相互に促進しあうことは、個体の発達史と社会の文明史のいずれの面からみてもいえる。子供が親にたいして秘密をもつようになるのは、自他未分的な関係を乗り越えつつあることを示している。また、近代におけるプライバシーの確立という個人の秘密保持は、個人主義の誕生と密接な関係にある。G. ジンメルは、この点について次のように述べている。「秘密が第一級の個人主義化の契機であり、しかも典型的な二重の役割においてそうであるということである。すなわち第1に、強く人格的に分化した状態の社会関係は、高い程度において秘密を許し、さらにそれを要求するということであり、第2に、逆に秘密はそのような分化状態を支え、さらにそれを高めるということである。」（[1979：48]）。

(2)秘密の共有（意図的漏洩）

秘密のなかには、相手にたいする反感や敵意のように、それを露わにすると、対人関係を損なう恐れのある秘密もあるが、そのような例外的な場合を除くと、秘密の意図的な漏洩は、相手を信頼していることのサインとして働くために、一般に相手との絆を深める。秘密を打ち明けられた相手は、自分が信頼されていることを知り、その返礼として相手にたいして（より大きな）信頼を抱く。その結果、相手は自分を一層信頼し、より大きな秘密を打ち明けることが可能になる。こうして、信頼関係が確立されるようになる。

秘密の共有が社会的な統合性を高めるのは、秘密の共有者と非共有者との集団的な分節化を契機にしている。例えば企業秘密は、企業内での共有をつうじて組織／環境との境界性と組織内の統合性を同時に高めている。秘密の共有に

よる社会的な統合化は、別の面からみれば、集団レベルでの秘密保持による集団間の分節化なのである。

ところで、秘密の意図的な漏洩には、また別な効果がある。秘密を意図的に漏らすことは、「隠されていたものを露わにする」点で真理と関連している。フーコーによれば、歴史上、性の真理を生み出す上で二つの大きな手続きがあった。それは、伝授と告白という、二つの秘密の意図的な漏洩形式に基づいている。「性愛の術」を備えた社会では、「秘密を保有している師への関係がこの知の根本をなす。……師だけがこの知を……秘儀伝授の儀式の果てに伝えることができる」([1986: 75])。

一方、「性の科学」を実践している社会では、性の真理を語るための社会的な手続きは、性の告白という方法をとった。「キリスト教の改悛・告解から今日に至るまで、性は告白の特権的な題材であった。それは、人が隠すものと言われている。ところが……もし万が一、それを隠さねばならない義務がひょっとして、それを告白しなければならない義務のもう一つの様相だとしたら? ……我々にとっては、真理と性とは結ばれているのは、告白においてであり、個人の秘密の義務的かつ徹底的な表現によってである」([1986: 80])。真理の産出には権力の関係が貫かれているが、西欧近代社会のなかで告白は、真理を生み出す技術のうちで最も高く評価されたものであったという。

(3)秘密の密告(非意図的な漏洩Ⅰ)

秘密は、「誰が、誰の、どのような秘密を、どういう仕方です」漏らすのかによって、さまざまな効果を発揮する。秘密の非意図的な漏洩には、本人にとっては非意図的であるが、第三者が密告というかたちで秘密を意図的に漏らすこともある。その場合には、当事者の関係に与える影響も、本人自身が意図的に漏らす場合とはおのずと異なってくる。

密告は、秘密の内容にもよるが、一般に当事者の社会関係にたいして破壊的に作用する。それは、「隠されていたものを露わにする」という真理探求的な態度とは違って、「隠されていたものが露わになる」ことに由来している。この事態には一種の「無気味さ」が伴っている。ドイツ語で秘密をあらわす「Gehei-

mnis」や「Heimlichkeit」は、「Heim（我が家）」「Heimat（故郷）」「heimlich（親しい、馴染みのある）」といった言葉と近接しているが、「heimlich」の反対語が「unheimlich（無気味な）」である。すでにS.フロイトは、シェリングの定義にならって、無気味さとは「秘め隠されているべきもので、しかもそれが外に現れたなにものかである（[1969：347]）」と述べている。

無気味さは、密告が行われた場合にも現れる。いま、AがBの秘密をCに漏らしたと仮定しよう。Aの密告によって、Bの隠されていた面がCにたいして露わになる。この事態がCに無気味さを与えるのは、Bの知られざる面が発見されたこと自体にあるよりは、むしろBの知られざる面がまだほかにもあるのではないかという疑惑や不安を抱かせる点にある。ひとたび疑惑と不安が芽生えたと、それは、時に不信にまで発展していく。そうなると、二人の関係は破綻し、終わりを告げる。本人の意図的な漏洩が信頼の絆を強めていくのとは対照的に、第三者の密告は、不信を植えつけ、当事者の間を引き裂いていくのである。

(4)秘密の露見（非意図的な漏洩Ⅱ）

第三者の密告も、密告された本人にとっては非意図的な漏洩であり、また分裂病患者が体験しているのも、秘密の非意図的な漏洩である。だが、これから取り上げるのは、そのいずれでもない。秘密が、あくまでも自分自身の行為を介して、しかも特定の状況内での他者の行為と関連しつつ、非意図的に漏れてしまうケースである。このような条件のもとで、自分の秘密が思いがけずに漏れてしまうのが秘密の露見である。

秘密が露見する際にも、非意図性の程度に応じてさまざまなタイプがある。まず第1に、全くの偶然や不注意によって秘密が漏れる場合がある。突然の突風にスカートがめくれあがり、目の前の若い男性にそれを見られてしまったとか、舞台上で演技をしている役者が前屈みになったとたん、着け方の悪かったカツラがボロリと落ちてしまった等々。

第2に、自分自身の意図的な行動の意図せざる結果として秘密が漏れる場合がある。不始末をしでかして会社の上司に叱られているところを自分の部下に

見られてしまったとか、鍵穴から部屋のなかを覗きこんでいたら、肩をたたかれたので振り返ってみると、部屋の住人がそこに立っていた等々。

そして第3に、秘密を仕方なく漏らす場合がある。ポン引きをして現在服役中の父親をもつエリート・サラリーマンが、彼のことを高く買い、ゆくゆくは自分の娘と一緒にさせようと思っている会社の重役に「君のお父さんは、今何の仕事をしているんだい?」と聞かれて、やむなく事実を話す等々。状況的な圧力のもとで意図的に漏らすことも、自分の意志や願望に反している点で「非意図的な漏洩」とみなしうる。

以上のケースは、いずれも恥（と笑い）を生んでいる。舞台裏に属するはずの出来事や事態が自分の意志に反して表舞台に現れる時、人は羞恥の念にかられるのである。

ところで、これまでに論じてきた秘密の四つの作用を予期理論的な視点から考察すると、秘密の露見という現象が社会現象のなかで特異な位置を占めていることがわかる。

自然現象とは違って、社会的な相互行為は因果連関をなすだけでなく、規範的な価値によってコントロールされている。そのため、将来の事態を予期するためには、相互行為に内在する因果連関を認識すると同時に、相互行為を規制している社会的な価値を把握する必要がある。予期には、予測（因果性）と期待（価値性）という二つの側面があり、相手の行為は、予測されると同時に期待されるわけである。期待の原初的な形態は、「～してほしい」という願望（感情性）であるが、社会的行為において期待の中核をなすのは、役割期待のように「～すべきである」という当為（規範性）である。

因果性を認識するにしても、価値を把握するにしても、予期を定立するためには論理的な判断に基づかねばならない。論理的な判断の基礎は、「規定（肯定）＝限定的否定」の論理にある。この二つの位相に対応して、予期も二つの位相からなる。例えば、「明日の正午、相手は喫茶店に来るだろう」という予期は、同時に「明日の正午、家にはいないだろう」「明日の朝、喫茶店にはいないだろう」等々という諸々の予期を含んでいる。そこで、①主題的に定立される

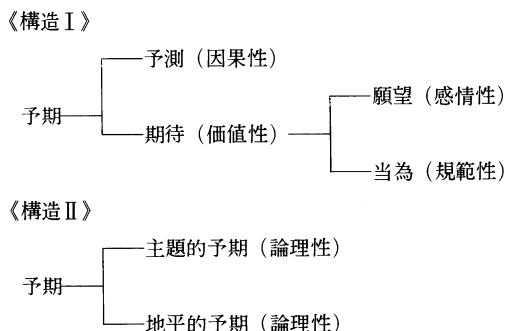


図2 予期の構造

予期を「主題的予期」、②その地平となる諸々の限定的否定によって構成される予期を「地平の予期」と呼ぶことにしよう（図2）。

特定の可能性を選び出す主題的予期にたいして、諸々の可能性を限定的に排除するだけの地平の予期は、必ずしも明確に意識されないゆえに、一見消極的な意義しかもたないようにみえる。しかし、現実の社会生活のなかでは、相手の行為を具体的に予期することは難しいため、地平の予期は、主題的予期に勝るとも劣らないだけの役割を果たしている。また、予期を定立したからといって、予期したとおりの結果が得られるとは限らず、期待はずれな結果に終わることもある。N. ルーマンにならって、前者のケースを「予期の充足」、後者のケースを「予期の違背」と呼ぶことにしよう（[1990]）。

秘密の四つの作用を予期理論の立場から整理すると、次のようになる。

まず秘密が保持されている状態は、コミュニケーションが行われていない状態と同じではない。コミュニケーションには、主題的予期が充足される水準と地平の予期が充足される水準とがある。主題的予期が充足されるとは、受け手が予期していたとおりのメッセージを受け取ることであり、地平の予期が充足されるとは、受け手が主題的予期に反するメッセージを受け取らないことである。前者が「（受け手が）知るだろうと思っていたことを知らせる」ようなコミュニケーションであるのにたいして、後者は「（受け手が）知るはずのないこと

を知らないままに終わらせる」ようなコミュニケーションである。秘密の保持とは、コミュニケーションの不成立ではなく、地平的预期の充足を意味している。

次に、秘密が本人の口から意図的に漏らされる時には、一般にその前段となる一連の手続きが踏まれている。送り手は、状況を考えた上で、話の流れを本題へと向けながら、秘密を打ち明けるための事前のサインを送る。これらの状況的・言語的なサインを受け取ることで、受け手は、送り手から何かが知らされることを预期する。この预期に応えるかたちで、秘密が打ち明けられる。それゆえ、秘密の共有の場合には、主題的预期が充足されている。秘密の保持と共有は、作用の点では正反対でありながら、预期の充足という点では共通性を有している。つまり、自他（集団間）の分節化と社会的な統合化は、ともに相手の预期を充足させるような社会的な働きなのである。

それにたいして、第三者の密告の場合には、第三者と、密告を受けた一方の当事者との間には预期充足的なコミュニケーションが行われているとはいえ、問題なのは、二人の当事者の関係が第三者の密告によってどのように変化するかという点にある。密告を受けた一方の当事者は、相手の预期せざる面を知り、预期の違背を経験する。そして、相手にたいする自分の態度を変化させる。一方、密告されたもう一方の当事者も、相手方におけるこの预期せざる突然の変化を目の当たりにして预期の違背を経験する。第三者の密告が社会関係を破壊するのは、このような双方における预期の違背に基づいている。

ところで、秘密の露見は、これらのいずれとも異なっている。まず、秘密の非意図的な漏洩は、相手に预期の違背を経験させるが、この预期の違背は「無気味さ」を生むのではなく、むしろ「笑い」を誘っている。「人に笑われないように」とは「人前で恥を搔かないように」と同義であり、一方の側が恥を搔き、他方の側が笑うという現象は、同一の状況を構成する二つの側面である。笑いがある種の認知的なズレによって惹き起こされることは、笑いの理論のなかでは周知の事実であり、例えば I. カントは、笑いを次のように定義している。「笑いとは、張りつめられた预期が突如として無に変わることから起こる情緒であ

る」([1965:277])。秘密が露見する場合には、知るはずのないことを知らされてしまい、地平的予期が無に帰してしまう。そこから笑いが生ずるのである。相手の予期を裏切りながら、相手に無気味さを与えないのは、不本意ながらもあくまで本人が秘密を漏らしているからである。

しかし、予期の違背はそれだけではない。相手の行為に関してばかりでなく、自分自身の行為に関しても予期の違背を経験する。密告の場合には、密告された本人にとって秘密が非意図的に漏れたとはいえ、自分自身はその漏洩には全く関与していない。自分が自分の意志に反する行為をしてしまったわけではない。

ところが、秘密の露見の場合には、自分の行為が自分の意志に反する結果を招いている。「知るはずのない秘密を知ってしまった」という相手の予期の違背体験は、「知らせるつもりがなかった秘密を知らせてしまった」という自分の予期の違背体験と対応している。ここでは、(自分の行為に関する)相手の予期の違背体験と(自分の行為に関する)自分の予期の違背体験とが同時に起きている。予期理論的に定式化すれば、秘密の露見とは、「予期の二重の違背」として生ずる相互性のズレのことである。

秘密の露見は、これまでのいずれのケースとも異なるが(図3)、同時にそれらのケースの結節点でもある。秘密の露見は、①秘密を保持しようとしながら、②直接自分自身の行為を介して秘密を漏らし、しかも③その漏洩は非意図的であるというケースである。それゆえ、秘密の露見は、①「前提」において秘密の保持と、②「結果」において秘密の共有と、③「前提と結果の結合様態」に

	秘密の保持 (非漏洩)	秘密の共有 (意図的漏洩)	秘密の密告 (非意図的漏洩Ⅰ)	秘密の露見 (非意図的漏洩Ⅱ)
作用類型	分節作用	統合作用	破壊作用	無化作用
現象形態	各種の境界設定 (自他分節・集団分節)	信頼 (親密・連帯)	不信 (疎遠・対立)	恥 (羞恥・恥辱)
予期状態	地平的予期の充足	主題的予期の充足	予期の一重の違背	予期の二重の違背

図3 秘密の作用

において秘密の密告とつながっている。

秘密の露見が生ずると、自己と他者は「間の困惑」（内沼幸雄）を体験する。予期の相補性によって支えられてきた秩序の流れは、そこで途絶えてしまう。この現象は、関係の破壊に似ているが、関係の無化として起こる。無化作用とは、一切の社会的な営みを無に還元するとともに、またそこから一切の営みを派生させるような働きである。恥に内在する作用は、この無化作用である。

H. M. リンド（[1983]）は、恥の特色として、①思いがけず身をさらすこと、②不調和や食い違い、③信頼を失うこと、④自己全体を含むこと、⑤悲劇との対決、を挙げているが、①～④は秘密の露見のもつ特色と合致している。①は秘密の露見そのものである。②は相互性のズレと対応する。③は秘密の共有および秘密の密告との関係を示している。この二つは、それぞれ信頼と不信に関連しているが、秘密の露見は、非意図的な漏洩という点で秘密の密告と共通している。秘密のたび重なる露見によって、頻繁に恥を搔いていると、信頼を失うことになる。そして、④は秘密の保持との関係を示している。自己は秘密の保持によって支えられている以上、秘密の露見は自己全体の危機を招来する可能性を孕んでいる。

このように、秘密の露見と恥との間には内在的な連関が存在する。とはいえ、これまでの説明では「秘密の露見はすべて恥になるのか」「恥はすべて秘密の露見なのか」といった問題に答えられたわけではない。そこでこれまでとは逆に、恥の多様な現象を取り上げ、恥という現象の全体像を描き出しながら、この問題に答えてみよう。

Ⅲ．恥

1．恥の精神病理としての対人恐怖

人間の心的現象を解明する上で一つの有力な手掛かりとなるのが精神病の研究である。精神病患者の世界は、健常者の世界からの単なる逸脱ではなく、むしろそれを裏面から照らし出す鏡になっている。そこでまず、恥の精神病理といわれる対人恐怖を取り上げることにしよう。

精神分裂病と対人恐怖が異質な病理であることは間違いないが、恥がそもそ

も秘密に関連しているならば、対人恐怖も秘密の精神病理としての様相を呈するはずである。対人恐怖について、木村敏は次のように述べている。「赤面恐怖の人が恐れているのは、なにかが顔色に出ること、内面が外面に現れ出て相手に気取られること、秘密が露見することなのだろう」([1972 : 194-195])。「他者によって弱点をとらえられるという対人恐怖一般の構造は、自己臭恐怖症においてもっとも直接的・無媒介的な姿をとる。自己の秘密の弱点は、おいとなって周囲に発散し、否応なしに他者にかぎつけられる。……自己は自分から、いわば能動的に、しかも意志に反して、自己の秘密を外に漏らしてしまう」([1972 : 199])。

対人恐怖の好発期は、分裂病と同様に青年期であり、人見知りの性格の人間に多く現れる。内沼幸雄 ([1983]) によれば、発病後の症状は、赤面恐怖→表情恐怖→視線恐怖→醜貌恐怖・自己臭恐怖へと変遷していく。この病理は、赤面を体験した患者が赤面を克服しようと努力するところから始まる。その際、本当は「間」の困惑によって赤面したにもかかわらず、患者は、逆に「赤面するから恥ずかしいのだ」という思いを抱く（赤面恐怖の段階）。そのうちに、患者は、「自分の顔がこわばってはいないか」等々といった表情について悩むようになる（表情恐怖の段階）。

それでも患者は、「弱気な自分を人前に晒すまい、相手を正視できる人間になろうと努める」が、やがて自分の視線が相手を不快にしていると思ひ込むようになる。最初に抱いていた他者の視線にたいする恐怖は、自分の攻撃的な視線にたいする恐怖へと転ずる。ここで罪の意識が覚醒するが、同時にまた「それを覆い隠そうとする仮面性」が現れる（視線恐怖の段階）。そして最終的には、「自分の姿は醜いのではないか」「他人に嫌がられるような臭いを発散しているのではないか」という妄想的な確信を抱くまでに至る（醜貌恐怖・自己臭恐怖の段階）。

対人恐怖は、このように著しい症状変遷を伴っているが、それにもかかわらず、「絶望的投企」とも呼ぶべきある種の運動に貫かれている。というのも、対人恐怖の病変過程は、秘密を保持しようとするほど、より大きな秘密を

抱き、その秘密が露見していくような悪循環の過程をなしているからである。

患者の最初の秘密は、例えば「意中の人」といったような誰もがもっている秘密であり、〈特定の対象や事柄〉に関する秘密であった。秘密を保持しようとする患者の努力は、赤面体験とともに始まるが、この必死の努力のなかで、秘密はかえって膨れあがり、そして漏れていく。患者にとって他人に知られてはならない秘密は、赤面恐怖の段階では〈赤面する不甲斐なさ〉であり、表情恐怖の段階では、赤面という特定の表情に限定されない〈表情全般のぎこちなさ〉である。こうした対人的な緊張としての秘密は、本人が意識すればするほど、他人に感づかれるところとなる。

視線恐怖の段階に至ると、患者の秘密は、もはや他者の視線に晒された自分のなかに生まれる秘密にとどまらなくなる。隠蔽すべきは、自分をさらし物にする人たちを見返そうという自らの攻撃性であり、〈自分の視線に内在する破壊力〉である。ところが、破壊力をおびた視線で相手を見ることは、自分もそうした視線で見られているのではないかという不安を一層強める結果となる。内沼も指摘しているように、「実際に患者は、被害者意識において、単に他人に「見られる」存在となるだけではなく、……「知られ、あばかれる」存在と化す」〔1983：138〕。こうして、醜貌恐怖や自己臭恐怖という最終段階においては、〈自分の姿〉〈自分の存在〉そのものが他者に感知されてはならない秘密となり、他者の面前に立つこと自体が秘密の露見となる。

患者における恥辱の深まりは、秘密が拡大しては露見していくことと対応している。対人恐怖は、秘密が現前の他者の反応に媒介されながら漏れる点で精神分裂病から明確に区別されるが、最終段階では、分裂病と隣接している。「自己臭恐怖は、……より広汎な精神障害（例えば精神分裂病）の部分症状にすぎないこともある」（木村敏〔1972：186〕）。

2. 恥の諸形態

対人恐怖が恥と秘密との関連性を裏づける一つの傍証になるとはいえ、恥の現象は、秘密と同様に多様である。日本語には、恥を表現する数多くの語彙が

ある。①みっともない、②きまりが悪い、③はずかしき（相手が立派な）、④間（バツ）が悪い、⑤照れる等々。これらの言葉からもわかるように、恥には、一般にいう「恥」以外に、はにかみ、照れ、人見知りといったものも含まれる。人に褒められた時に感ずる「照れ」も恥の範疇に入るのであり、この照れが自分の弱点の現れでないことは確かである。しかし、このような現象的な多様性にもかかわらず、恥はすべて秘密の露見になっている。そのことを次に示そう。

(1)人見知り

ボールビーの「八か月不安」に示されるように、人見知りは、人間の発達過程のなかできわめて早期に現れる。人見知りこそ、人間が最初に体験する恥の意識であり、恥の原初形態である。小此木啓吾は、S. フロイトや M. クラインの理論を援用しながら、人見知りが三つの不安を含んでいることを指摘したが、その見解を踏まえると、何故、人見知りが対人恐怖の病前性格をなしていたのかわかる。

乳児や幼児は見知らぬ人物に出会った際、その人物に三つの不安を抱くという。まず第1に、親しいものを期待しながら、それを見い出せないとわかって不安を感じる（「見知る不安」）。

第2に、隠されていたものが露わになることに伴う無気味さとしての不安を感じる（「無気味さ」）。クラインによれば、乳児は、母親にたいして、自分の欲求を充たしてくれる「よい母親 (good mother)」とそうでない「悪い母親 (bad mother)」という二つのイメージをもち、しかもこれらが同一の母親であることを十分に認識していない。そのため、見知らぬ人物に出会った時、乳児は「よい母親」の不在を知るだけでなく、「よい母親」のなかに隠されていた「悪い母親」をその人物のなかに見いだす。

そして第3に、自分がどのように評価されるのだろうかという不安を感じる（「見知られる不安」）。「悪い母親」を投影された見知らぬ人物が自分をどのように評価し、また自分が相手の期待どおりに振舞えるのかどうかわからなくなる。こうして「見られる不安」におののく。

要するに、人見知りとは、自分が他者のなかに予期（期待）していなかった

面を発見することによって、他者も自分のなかに予期（期待）していなかった面を発見するのではないかという不安を抱くことである。このような事態は、自他を分節する過程で不可避免的に発生してくる。なぜなら、自他を分節するとは、他者が自分とは異なる仕方でも認識したり行動したりすること、つまり他者が自分の予期を裏切る可能性をもった存在であることを了解することだからである。

対人恐怖における秘密の露見も、実はこの事態に根差している。自分の秘密が他人に知られたという思いは、他人が自分のなかに予期していなかった面を発見したのではないかという主観的な体験を基礎にしている。そもそも自己にとって保持すべき秘密は、他者の予期との関連のなかで形成されている。社会的な相互行為は、予期の相補性によって成り立つが、予期の相補性は、必ずしも主題的予期レベルで実現されるわけではない。相手が教師であることを知って「毎日研究に励んでいるだろう」という主題的予期を立てると、期待外れに終わることが多い。予期の相補性が樹立されねばならないのは、「教師であるからには、毎日パチンコ屋に行くことはないだろう」「雀荘に入り浸っていることはないだろう」等々といった地平的予期レベルにおいてである。地平的予期に反する一切の側面を隠蔽し、地平的予期を充足させることが、パフォーマンスを成功させるための必須の条件である。

こうして、社会的相互行為の基本的な成立要件として秘密が発生する。自己を確立する上で秘密を保持しなければならないのは、なにも自分の弱点や欠陥といった実体的なものを秘かに抱え込んでおく必要があるからではない。秘密を保持するとは、地平的予期レベルにおける相補的な予期様式を内面化し、それを実現することなのである。秘密の保持は、自他の境界構造を設定し、相互行為における予期の相補性を確立する上で、その媒介項になっている。

秘密が他者の予期に即して形成されている以上、秘密が漏れているか否かは、他者が自分のなかに予期していなかった面を発見したか否かにかかっている。その問題は、送り手の一存で決定されるわけにはいかず、受け手の判断にも委ねられている。そのために、秘密には本人の意志を越えて漏洩する可能性

がつねにつきまとしており、それが「見知られる不安」(人見知り)や「あばかれる不安」(対人恐怖)となって現れるのである。

もちろん、自他境界の萌芽しかみられない人見知りの段階では、秘密は明確な輪郭を形成してはいない。だが、自分と他者が一定の予期(期待)のもとで捉えられているということは、自他関係のなかで相手から期待されている面と期待されていない面(隠蔽されるべき面)があり、しかも、相手の期待は自分の意志に反して破られうるということが前反省的かつ原初的なレベルで了解されていることを意味している。人見知りと対人恐怖の核心にあるのは、「秘密は保持されねばならないと同時に露見しうる」という秘密の二面性であり、この共通性が二つの恥の現象を結びつけている。それゆえに、強い人見知り性が対人恐怖の病前性格をなしていたのである。

(2) 恥辱——公恥と私恥

M. シェーラーは、恥が価値意識の発達を前提にしていることをすでに洞察していたが、恥と価値意識は、秘密を介してつながっている。予期のなかで、期待されるべき面と隠蔽されるべき面をそれぞれ担っているのが価値と秘密である(「反価値的秘密」はこの秘密の下位類型であることに注意!)。そして本稿の仮説に従えば、恥とは、価値の裏面である秘密が本人の意図に反して表に現れ出た時の体験である。

実際、この三者の関係は恥のすべてのケースにおいて認められる。人見知りの場合、価値は、「よい母親」「悪い母親」という評価をくだす感情性の価値すなわち「好き嫌い」であるが、この原初的な価値意識に基づいて、自分にたいする期待面と隠蔽面が分けられている。「見知られる不安」とは、見知らぬ人物のなかに投影された「悪い(嫌いな)母親」が「悪い(嫌いな)自分」を発見するのではないかという不安、いいかえれば、「自分は人から嫌われるのではないか」という不安である。この不安が恥意識の原型をなしている。恥が「逆立ちした愛」(向坂寛 [1972]) などといわれるのもこの点からうなずける。

愛という感情性の価値は、初期の段階において自他関係の良否を判別する唯一の基準であったが、認知能力や価値判断能力の発達に伴って、各種の規範性

の価値がその上に築き上げられていく。その際、内面化された価値は、本人の固有な自我理想をかたちづくる構成要素となるか否かに応じて大きく二つのタイプに分けられる。内面化された価値のなかで基層をなすのは、あらゆる対面的な相互行為・あらゆるコミュニケーションを成り立たせるための基本的な価値である。ただし、この価値は、その一般性と普遍性のゆえに、本人を種別化したり個別化したりする働きをもたない。自我理想の実質的な成分となるのは、その上層に位置する価値であり、本人の社会的な特性を規定する働きをもっている。

これらの価値を、それぞれ「コミュニケーション価値」「自我理想的な価値」と呼ぶことにしよう。いうまでもなく、コミュニケーション価値の裏面をなすのがパフォーマンス的な秘密であり、自我理想的な価値の裏面をなすのが反価値的秘密である。これらの秘密が露見した時に生ずる恥が、それぞれここでいう「羞恥」と「恥辱」である。羞恥は後回しにして、まず恥辱について説明しよう。

ここで恥辱とは、日常的な恥辱の概念より広いが、単なる「間の悪さ」「照れくささ」とは違って、「みっともない」「きまりが悪い」といった要素を含んだ恥を指す。したがって、そのなかには、恥辱性の薄いものから屈辱的なもので、さまざまな恥が含まれるが、いずれにしても、恥が自我理想からの失墜に由来し、一定の劣位性を意識させる点で共通している。そして恥辱には、人前でかく恥と一人ひそかに感じる恥とがある。作田啓一〔1967〕を踏まえた井上忠司〔1977〕の用法にならって、前者のタイプを「公恥」、後者のタイプを「私恥」と呼ぶことにしよう。

日常生活のなかで最も多く目にするのが公恥である。次に紹介するのは、その典型例である。先祖代々続いた名主の家系をもつ「彼女は、聾啞者である長男を努めて世間から隠そうとした。彼女にとって名門の末裔から『片輪者』が出たということは「一家の恥」であり、……「名家の息子が出稼ぎに行っていることが世間様に知られれば一家の恥になる」(宮本忠雄編〔1977: 194-195])。彼女にとって長男の存在は、「名家」という社会的価値に支えられた自我理想を

実現する上で隠蔽すべき反価値的秘密となっている。そうした息子をもつことは、誕生前においては、恐らく予想もしなかった事態であり、非措定的秘密であったが、誕生後においては、彼女の行動をも規定する措定的秘密になっている。「一家の恥」は、この秘密の露見として体験されている。

一方、私恥は、自我理想からの失墜が自分だけに意識される恥である。個人の心的世界は、さまざまな規範的な価値の内面化に伴って複合的な構造を形成している。そのため、自分とまわりの人間が違った価値基準に従って自分の行為を評価する場合には、期待されるべき面と隠蔽されるべき面に関して自他の間に食い違いが生じてくる。まわりの人間には恥と映らない事態も、自分にとっては恥として体験されることがある。作田や井上によれば、私恥は、本人が所属集団ではなく準拠集団に依拠して、自己を捉える場合に生ずる。その一例として、作田は次のケースをあげている。「ドミートリ・カラマゾフは、友人から託された金を遊蕩に費やしたが、彼が内心恥じたのは、遊蕩の行為に関してよりも、むしろその金を半分だけ残しておいたけちくささについてであった」([1967: 12])。ドミートリにとっては、けちくさは、準拠集団に依拠した自我理想を実現するための反価値的秘密になっている。そして恥は、隠蔽されるべき秘密が自分自身に露見したことによって生じている。

要するに、公恥と私恥の違いは、自己呈示の評定者が他者であるか自己であるか、また自我理想を構成する価値が所属集団の価値であるか準拠集団の価値であるかという点にある。だが、どちらにおいても、恥は自我理想からの失墜として体験されており、その失墜は、自己呈示における反価値的秘密が露見したことに起因している。両者は、反価値的秘密の露見という点で構造的には同型なのである。

公恥と私恥、とりわけ公恥は、ベネディクトをはじめ、恥の理論のなかで早くから研究されてきた。これまで恥の理論は、恥辱を主題にした理論と羞恥を主題にした理論とに分裂し、両方を対象にしている場合でも、それぞれを別々の形式で論述してきた。そのために、今日なお、恥辱と羞恥を統一的に説明するまでには至っていない。

初期においては、恥辱系の理論が主流をなしており、恥の理論は公恥に基づいて彫琢されてきたといっても過言ではないだろう。例えば、罪と恥をフロイトの「超自我」と「自我理想」に関連づけて捉えた G. ピアス（[1953]）は、罪が超自我によって設定された境界を侵犯することであるのにたいして、恥は自我理想に基づく目標へ到達することの失敗であると考えた。また、森口兼二（[1963]）は、罪を「善悪価値の基準」、恥を「優劣価値の基準」として定義した。これらの理論は、たしかに公恥や私恥を把握する上で一定の有効性をもっているが、それとは別のタイプの恥すなわち羞恥を扱う際には、分析の威力を失ってしまう。そこで次に、この羞恥の問題に移ろう。

(3) 羞恥

羞恥の理論として今日でも高い評価を受けているのが M. シェーラーの理論（[1978]）である。シェーラーによれば、恥が生まれるのは、普遍性と個性をめぐる志向性のズレが自他の間に起こるからだという。つまり、自己が普遍者として振舞う時に、他者は自己を個別者として扱う場合、また逆に、自己が個別者として振舞う時に、他者は自己を普遍者として扱う場合に、恥が生ずるという。例えば、女性の患者（普遍者）が医者（普遍者）の前で服を脱ぐ時、あるいは恋人同士（個別者同士）が服を脱ぐ時には、羞恥は生まれない。しかし、女性患者（普遍者）が個別者としての医者の視線を感じた時や、自分が恋人（個別者）から単なる一人の異性（普遍者）として扱われた時には、羞恥が生まれる。

一見、シェーラーの理論は羞恥の現象をうまく説明しているかのように見える。しかしこの理論は、羞恥の理論としてみても問題を孕んでいる。

まず第 1 に、普遍者と普遍者、個別者と個別者というかたちで志向性が一致している場合にも、羞恥は生まれるのである。例えば、会社の社長（普遍者）が社員（普遍者）に用務員（普遍者）として間違っただけで認知された時、社長は羞恥を覚えるだろう。また、一人だと思って部屋のなかを裸で歩き回っている自分（個別者）の姿を窓の外にいた恋人（個別者）に見られていたことに気づいた時にも、羞恥を覚えるだろう。そして、恋人（個別者）同士であっても、最

初に服を脱ぐ時には羞恥を感じるだろう。

シェーラーの見解では、このように説明のつかない事例がいくつかある。しかし、これらのケースは秘密の露見という点で共通している。まず、女性患者にとって裸体は、医者・患者／関係のなかでは秘密を構成しないが、一般男性との関係のなかでは秘密を構成している。医者が普遍者から個別者へと志向性を変化させた時、患者にとって自分の裸体は、隠蔽されねばならないにもかかわらず医者の視線に晒されており、ここに秘密の非意図的な漏洩が生じている（恥の発生）。

恋人同士にとっても裸体は、はじめは秘密に属しており、最初に服を脱ぐ時、秘密の非意図的な漏洩が起こっている（恥の発生）。それ以後は、お互いにとって裸体は秘密ではなくなる（恥の未発生）。ただし、部屋のなかで一人きりだと思って裸体になった時には、裸体は誰にも見られるはずのない秘密となり、恋人に見られたと気づいた瞬間に、秘密の非意図的な漏洩が生じている（恥の発生）。さらに、自分を「恋人」と思ってくれない人にとっては、自分の魅力のなさという隠蔽すべき面が不本意な仕方で露わになっており、用務員に間違えられた社長にとっても、「社長」としての自分の地平的予期が裏切られている。どちらにしても、秘密が非意図的に漏れている（恥の発生）。

そして第2に、いままでの事例は、どちらかというところ「みっともない」「かっこ悪い」といった公恥に近い羞恥である。恋人に自分を「恋人」として認知してくれない時の恥は、恥辱性を含んでいる点で、ほとんど公恥ないし私恥である。それにたいして羞恥とは、例えば、①今しがた別れたばかりの相手と再び鉢合わせになってしまった時の「間の悪さ」や、②友人と道を歩いていたら、家族とバッタリ顔を合わせてしまった時の「照れくささ」、あるいは③人前で褒められた時の「照れ」といった、恥辱性を伴わない恥である。どのケースにおいても、普遍者／個別者をめぐる志向性のズレが生じているようには思えない。

シェーラーの理論の第2の問題は、真の意味での羞恥の現象を十分に説明できないという点にある。シェーラーの理論が羞恥の現象にたいして包括的な説

明力をもちえないのは、志向性のズレという恥の核心に触れながらも、それを普遍者／個別者という狭い枠組のなかで解釈したことによる。秘密の露見は、すでに説明したように、予期の二重の違背という相互性のズレを意味している。普遍者／個別者をめぐる志向性のズレは、予期の二重の違背という相互性のズレの一特殊ケースであり、またそうした相互性のズレを惹き起こす限りにおいて、恥を生んでいるのである。

今までのケースからもわかるように、秘密は決して実体ではない。相互行為において何が秘密となるのかは、予期の内容に依存している。予期のなかで、期待されるべき面と隠蔽されるべき面との区分は、価値以外にも、予期に関連する諸要因すなわち相互行為、状況定義、そして状況隔離によって規定されている。羞恥と関連の深いのがパフォーマンスな秘密であるが、パフォーマンスな秘密は、「状況性—構造的」の程度に応じて三つのタイプに分けられる。

まず第1に、状況的に発生するタイプの秘密がある。別れの挨拶をした後で再び出会った際の「間の悪さ」は、前に説明した「朝の挨拶」のケースと同様、秘密の露見に起因している。自分自身の言動を即座に否定するような言動、G. ベイトソン（[1986]）流に言えばダブル・バインド的な言動は、相手を困惑させるゆえに慎まねばならず、社会的コミュニケーションを成立させるための秘密を構成する。この種の秘密が発生するか否かは、個々の状況に依存している。

第2に、状況の構造化に対応して、各状況内において構造的に発生するタイプの秘密がある。人々は、家庭、学校、職場といった、社会的相互行為がある程度構造化された状況のなかで他者と出会っている。そして各々の状況は、状況隔離によって他の状況から切り離されている。状況隔離は、いわば表舞台と舞台裏を同時に設定する仕切りであり、これによって舞台裏に属する出来事が秘密として保持されうる。

とはいっても、現実の社会生活のなかでは、時に状況隔離がうまく働かず、表舞台と舞台裏との融合が起こってしまうことがある。舞台裏に属するはずの出来事や事態が表舞台に飛び出してくるわけである。こうして秘密が露見する場合にも、羞恥が生まれる。それが、友達と歩いている時に家族と鉢合わせに

なって「間のわるい」思いをしたという例である。状況ごとに相互行為が構造化されるためには、他の状況を構成する要素によって相互行為が攪乱されてはならないのであり、他の状況の構成要素は、相互に秘密を構成しなければならない。

そして第3に、状況貫通的に存在する構造的な秘密がある。シェーラーによれば、羞恥のなかにある自己価値感情の部分と愛の部分とのダイナミズムによって、羞恥は、誇りにも謙虚さにも近づく。個人のなかに誇りと謙虚さとがともに育つ時、一つの構造的な秘密が構成される。それが「内に秘めた誇り」である。この秘密は、両方が揃ってはじめて心のなかに宿る。なぜなら、誇りをもたなければ、秘めるべきものがなく、また謙虚さをもたなければ、秘められることがないからである。「内に秘めた誇り」は、誇りとして他者から分離された自己を内部から支えるとともに、謙虚さとして他者との共存性を高めてもいる。

「内に秘めた誇り」は、他者とかかわる自己の一切の行為に内在する構造的な秘密であり、自他の分離を前提にしつつ自他の共存をはかる構造的な要因として作用する。人見知りのなかに「人に嫌われるのではないか」という不安が潜んでいることはすでに述べたが、この不安は、自意識に目覚め始めた個体が自他の分裂の危険性として感じ取った不安である。「内に秘めた誇り」は、自他が相互の自律性を失うことなく相補的な関係を取り結ぶための一つの解決法として編み出された構造的な秘密である。そして、人に褒められた時に感ずる「照れ」とは、この秘密の露見なのである。自分の心のなかに抱いていたものが他者の口から明らみに出された時、秘密の非意図的な漏洩が生じている。誇りが未発達な幼児や謙虚さに欠けた自信家をいくら褒めても、喜ぶだけで照れないのは、秘密の露見という事態が成立しないからである。

このように羞恥の核心は、パフォーマティブな秘密の露見にある。羞恥が恥辱性を伴わないのは、価値と無関係だからではない。パフォーマティブな秘密は、コミュニケーションな価値という、個別化された人間同士の円滑なコミュニケーションをはかるための価値に依拠して構成されていたのである。この価

値は、誰もが内面化しなければならないゆえに、この価値を実現しても他者に対する優越性にはつながらない。羞恥が恥辱性を伴わないのも、優劣性にたいする非関与性というこの価値の性質に由来しているのである。

深い恥辱性を帯びている点で、対人恐怖症患者における秘密は反価値的秘密にみえるが、実はそうではない。この秘密は、反価値的・措定的な秘密に転換されたパフォーマンスな秘密である。一般の健常者は、パフォーマンスな価値と自我理想的な価値を内面化しながら、匿名的なコミュニケーション行為者としての存在性の上に、個体としての固有名的な存在性を獲得する。ところが、対人恐怖症患者は「完璧なコミュニケーション行為者」を究極の自我理想にしてしまったのであり、それゆえ「無色透明な社会的存在」としての自己を呈示しようとしたのである。ここに、患者の企てが、「絶望的な投企」として必然的に挫折せざるを得ない根本的な理由がある。いずれにしても、他の誰よりも対人恐怖症患者のなかで大きな秘密として抱かれながら、その患者の反省的意識からも逃れさってしまうのが、パフォーマンスな秘密である。

以上のことから、秘密と恥の関係について次のような結論が導かれる。すなわち、すべての恥は秘密の露見として発生する。ただし、秘密の露見のすべてが恥を発生させるわけではない。秘密のなかで戦略的秘密は、恥には関与しない。なぜなら、戦略的秘密は、戦略的行為という独我論的な構造をもった行為の成否を決定する要因だからである。戦略的行為が不成功に終わったとしても、自分（たち）の目標が遂げられなかったにすぎない。自己呈示の行為も自分の目標に関連づけられているとはいえ、いかなる場合においても、オーディエンスとしての現実的・想像的な他者に志向している。戦略的秘密の露見は、反価値的秘密の露見となりうる限りにおいてのみ、恥と結びつく。例えば、重大な企業秘密をうっかり漏らして羞恥を抱くのは、自分のうかつな面が露呈したからである。

恥は、本質的に社会的である。恥辱（公恥と私恥）と羞恥の違いは、露見する秘密の種類にあり、また秘密と関連している価値の種類にある。自我理想的な価値は、地位・身分・階層・機能集団に含まれる社会的な種別性をもとにし

て個体の固有名性を型どっている。一方、コミュニケーションな価値は、コミュニケーション原理の一般性に基づいて個体の社会的・匿名的な存在性を形づくっている。パフォーマティブな秘密によって逆照射されたコミュニケーションな価値とは、次のような諸規範の複合体をなしている。①他者を前にしてたじろがないこと、②他者を困惑させないこと、③他者にたいする攻撃性（反感や敵意）を抑えること、③誇りをもち、かつ謙虚になること、④第三者の相互行為を攪乱しないこと等々。これらは、コミュニケーション論や語用論のなかで「会話の原理」として分析されてきたものである²⁾。

このように、恥の現象は多様であるにもかかわらず、その背後には共通の構造が存在していたのである。以上の考察を踏まえて、次にベネディクトの命題を検討してみよう。

3. 恥の文化

「欧米＝内面的制裁に基づく罪の文化、日本＝外面制裁に基づく恥の文化」というベネディクトの図式は、「欧米人＝自律的、日本人＝他律的」という認識と容易に結びつくために、その後数多くの反論を浴びた。日本人は私恥をも体験するゆえに外面的・他律的な存在ではないという批判³⁾は、その代表格といえよう。だが、私恥を持ち出すことは、必ずしも生産的な議論とはいえない。恥の本筋をなすのは、あくまで羞恥と公恥であり、私恥は公恥の派生形態にすぎない。また対面的な他者と無関係に一人恥入るところに人間の自律性が確証されるわけでもない。そして何よりも、この種の批判は、公恥を抱くことが他律的であるという考え方を暗黙裡に容認してしまっている。それゆえ、問題をも

2) 例えば、G. リーチは、「丁寧さの原理」として、①気配りの原則（他者にたいする負担を最小限にせよ）、②寛大性の原則（自己にたいする利益を最小限にせよ）、③是認の原則（他者にたいする非難を最小限にせよ）、④謙遜の原則（自己の賞賛を最小限にせよ）、⑤合意の原則（自他の意見の相異を最小限にせよ）、⑥共感の原則（互いの反感を最小限にせよ）を挙げている（[1987: 190]）。

3) 例えば、作田啓一やそれを踏まえた井上忠司等。作田のいう羞恥は、ここでいう私恥に相当する。なお、作田の論文は、秘密という言葉こそ用いていないが、秘密の社会的な観点からみて興味深い指摘をしている。

う一度振り出しに戻して考える必要がある。

まず最初に確認しておかねばならないのは、恥が自律性（個人主義）と他律性（集団主義）の対立よりも一層基底的な水準に位置しているということである。秘密の作用に照らしてみると、自律性（個人主義）と他律性（集団主義）は、秘密の保持と秘密の共有にそれぞれ親縁性をもっている。秘密の保持は自我分節を推し進め、反対に、秘密の共有は社会的な統合性を強化する。ところが、地平的予期と主題的予期の違いを拾象するならば、これらは、予期が充足されている点で共通している。

それにたいして、秘密の露見は、予期の二重の違背であり、秘密の保持と秘密の共有にたいして等しく隔たっている。秘密の露見である恥は、自律性（個人主義）と他律性（集団主義）との対立が現れるレベルのメタ・レベルに位置している。恥の現象は、自他の一定の分節化を前提にしながら自他の間に相補的な予期様式を確立するという、社会の成立にかかわる普遍的かつ根本的な場面において出現するのである。

恥は、他の多くの社会現象と同じ水準の現象ではない。恥は秘密の露見である以上、その特徴は無化作用にある。秩序にたいする無秩序の関係と同様に、無は、有と対立しながら、それでいて諸々の有を可能にする本質的条件をなしている。秘密は、隠蔽された側からみれば、有にたいして無、知にたいして無知を構成している。ジンメルは、秘密を「消極的あるいは積極的な手段によって支えられた現実の隠蔽」（[1979：40]）と定義したが、この定義は、秘密の果たす機能の半面しか表現していない。秘密のなかで、現実の隠蔽というネガティブな側面は、あるべき現実の創出というポジティブな側面と対をなしている。秘密とは、あるべき現実を創出するために、一定の手段に基づいて行われる、現実的ないし可能的な事態の隠蔽であり、いいかえれば理想的有を実現するために構成された無知である。

価値と秘密は、この理想的有を実現する上で楯の両面をなしている。秘密は、隠蔽されるだけでなく、時に意図的に漏らされることによって、理想的有の現実をもたらすこともあるが、いずれにしても、それが秘密として構成されてい

ることに意義がある。一方、秘密が露見した場面においては、人は「有るべきものが無く、無いはずのものが有ること」を思い知らされる。それは、秩序の運動の只中にカオスがふいに顔をのぞかせた瞬間に似ている。したがって、恥とは、予期の二重の違背によって生じた（パフォーマティブないし反価値的な）秘密の露見であり、そうした相互性のズレによって惹き起こされる有と無の転倒現象である。

この有と無の転倒が無化作用を併発するのである。この転倒がささいな出来事に関して起こるならば、お互いに「笑って」済まされる。しかしそれが、重大な事柄に関して起こるならば、一方は恥辱を味わい、他方は軽蔑をするほど大きな無化作用として働く。これまで当事者が営々と築き上げてきた関係は、一瞬のうちに、しかも双方にとって不本意な仕方て無に帰してしまう。

だが、恥の無化作用は、単なるネガティブな作用ではない。無は、理想的有の不完全な実現態である現実をはさんで理想的有と対置している。罪（犯罪）が社会的逸脱をとおして社会的統合力を高めるように（デュルケム [1978]）、恥は、無をとおして理想的有を想起させる。神学者ボンヘッファーは、「恥は根元から離れることについての口に言い尽くせない想起である。それは、この隔離にたいする悲しみであり、根元との一致に戻りたいという無力の願望である」と述べているが（土居 [1971]）、恥は、「根元との一致」すなわち理想的有の実現を目指して、さまざまな社会関係を蘇生させていく源でもある。恥の無化作用は、そうした創造的な作用でもある。

そうだとすれば、公恥が唯々諸々と他人に従う他律的な行動様式でも、また外面的な制裁様式でもないことは、もはや明白である。だがそれにもかかわらず、先のベネディクトの命題には一つの重大な認識が含まれているといわなければならない。なぜなら、この認識は、日本が「場の社会」であることを示唆しているからである。

対人恐怖症の発病率が欧米と比較して圧倒的に高いという事実からも伺い知れるように、日本の文化が恥の文化であることは間違いないだろう。ただ、日本と欧米の相異は、恥か罪かの点にあるのではなく、むしろ恥と罪の関係のあ

り方にある。恥が、愛といった感情性の価値のみならず、さまざまな社会規範といった規範性の価値に関連しているとはいえ、これらの規範は、社会規範全体を覆い尽くしてはいない。コミュニケーションを構成する諸規範は、普遍的・遍在的ではあるが、状況的なコミュニケーションを成り立たせるための一般的な規範であり、また自我理想的な価値にかかわる諸規範は、社会的種別性を伴った規範である。これらは、いわば「マイクロ規範」とも呼ぶべき規範であって、社会の全域性を保証する「マクロ規範」ではない。

「罪と恥」というテーマのなかには、同一社会におけるマクロ規範とマイクロ規範の関係という構造的な問題が隠されている。日本の社会では、マクロ規範とマイクロ規範が合体しており、予期の二重の違背という相互性のズレを惹き起こさないようにすることは、マクロ規範によって規範化されてもいる。そのために恥は、同時に罪として体験されるのである。対人恐怖症患者が「視線恐怖」の段階で対人関係を破壊する可能性を自ら生み出した時、罪の意識が覚醒したのは、対人関係の破壊がマクロ規範の侵犯でもあるからである。対面的な相互行為の成立が全体社会の成立につながらないことは社会学の常識であるにもかかわらず、日本の社会においては、それが現実のものとなっている。そこに「場の社会」たる所以がある。

では、「場の社会」とは何か。これについては、稿を改めて論ずることにしよう。今回は、日本社会を分析するための端緒をつかむだけに終わったが、次号以下、一応「ウチとソト」「甘えと相互贈与」「近代化と天皇制」「日本的コミュニケーション——秘密の社会技術論」について論ずる予定である。

文献

- ベイトソン, G. 1986『精神の生態学』佐伯・佐藤・高橋訳 思索社
ベネディクト, R. 1972『菊と刀』長谷川松治訳 社会思想社
土居健郎 1971『甘えの構造』弘文堂
デュルケーム, E. 1978『社会学的方法の基準』宮島喬訳 岩波文庫
Ekstein, R. & Caruth. E. 1972 Keeping Secrets, in *Tactics and Techniques in Psychoanalytic Therapy* Hograth Press

- フロイト, S. 1969『フロイト著作集 芸術論』高橋義孝訳 人文書院
フーコー, M. 1986『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳 新潮社
ゴッフマン, E. 1974『行為と演技』石黒毅訳 誠信書房
ヘーゲル, G. W. F. 1956『大論理学』武市健人訳 岩波書店
井上忠司 1977『「世間体」の構造』NHKブックス
カント, I. 1965『世界の大思想11 判断力批判』坂田徳男訳 河出書房
木村敏 1972『人と人との間』弘文堂
—— 1975『分裂病の現象学』弘文堂
金田一春彦 1975『日本人の言語表現』講談社現代新書
旧約聖書 1989『聖書——新共同訳』日本聖書協会
リーチ, G. N. 1987『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳 紀伊国屋書店
ルーマン, N. 1990『信頼』大庭健・正村俊之訳 勁草書房
リンド, H. M. 1983『恥とアイデンティティ』鎌幹八郎他訳 北大路書房
宮本忠雄編 1977『躁うつ病の精神病理2』弘文堂
森口兼二 1963『自尊心の発達段階における罪と恥』『京大教育学部紀要』9
小此木啓吾 1970『笑い・人見知り・秘密』創元社
ピアジェ, J. 1968『思考の心理学』滝沢武久訳 みすず書房
Piers, G. & Singer, M. B. 1953 *Shame & Gilt* Norton, New York
向坂寛 1972『恥の構造』講談社現代新書
作田啓一 1967『恥の文化再考』筑摩書房
シェーラー, M. 1978『シェーラー著作集15』浜田義文訳 白水社
ジンメル, G. 1979『秘密の社会学』居安正訳 世界思想社
内沼幸雄 1983『羞恥の構造』紀伊国屋書店